



ふと

思い出す

川崎ゆきお

「よく、ふと思い出すとか言いますねえ」

「ああ、ふっとね」

「そのふとって、何でしょう」

「だから、ふと思い出したり、ふと気付いたり、ふと見たりするんだろうねえ」

「全部ですか」

「え」

「全部、ふとですか」

「ああ、たまに、ふとじゃない場合もあるねえ。話を変えるためとか、いきなり言うのもなんだから、急にふと思い出したとか」

「それは、本当のふとじゃないのですね」

「そうだねえ、ふと思い出したことにしているだけかな」

「じゃ、本当のふとって、何でしょう」

「何かの連想で、思い出したのだろうねえ」

「それはインスピレーションのようなものですか」

「そんな靈感じゃないと思いますよ」

「じゃ、どうして、ふとくるのでしょうかねえ」

「生理現象に近いんじゃないのかい」

「はあ」

「ふと尿意をもよおしたとかね」

「あ、それは意識的じゃないですね」

「まあ、本屋で紙の本に接していると、便意をもよおす人もいるらしい」

「本屋にトイレがないと大変ですねえ」

「紙に何かあるんだろうねえ」

「便所紙を連想するとか」

「便所紙、それはまた古い。一枚一枚ばらばらのあれでしょ」

「はい、最近滅多に売ってませんよ」

「君は今便所紙を連想したねえ」

「はい」

「それはトイレの話をしていて、ふと思い出したのでしょ」

「おそらく」

「それがふとでしょ」

「やはり、連想ですか」

「ただ、連想は手繰ったものなので、ふと出たというのとは少し違うかもしれませんねえ」

「連想じゃないと」

「それも、ふとなんだけど、もっと生理的な、直接的なね」

「じゃ、やはりインスピレーション」

「そんな上等なものじゃないと思う。ふとなんだから、ところかまわず。だから、生理現象に

近い」

「ふと思い出したことや、思いついたことは忘れやすいです」

「連想を手繰った形跡がないからでしょうねえ」

「いきなりですからねえ」

「そうそう」

「しかし、このふとは大事というか、隠れたる繋ぎ役なのですよ」

「ふと思いついたなんて言わないでも、やっている」と

「いろいろとふと思いつきますよ。しかし、それは口にしない。詰まらんことが頭に浮かびますからねえ。特に、こういう会話中は。それを全部出していたんじゃきりが無いし、話が進まない」

「だから、選択しているのですね」

「使えそうなもの、ふさわしいものをね。だから、かなりの量のふとが生まれていますよ」

「今もそうですか」

「はい、この話とは関係なく、今、入って来た客を見て、三つほどふとが出ましたよ」

「ああ」

「それにあなたの髪の毛、飛び出していますよ。よけいなものが、これ、散髪屋で切らなかったのですか」

「え、そんなことまで」

「あなただってそうでしょ。私の唇の左側に出来物が出来ています。多少は気になっていましたでしょ」

「はい、なっていました」

「これはかゆいので、かいたら出来物になったのです。この会話中でも、気になりましてねえ。まだかゆい。いや、少し痛みを伴っています。これは皮膚科で しょうかねえ。まあ、行くほどのことじゃない。というようなことを、話ながらも、ふと思っているのですよ」

「やはり、ふとは押さえないと いけませんねえ」

「そう思いましたか？」

「はい、ふと」

了